

復員(帰還)届



中国沙市駐留軍の記念写真アルバム

引揚証明書の表(上)と裏(下)

引揚証明書の表(上)と裏(下)

引揚証明書の表(上)と裏(下)

事実証明書

事実証明書

恩給請求書

恩給請求書

中国沙市駐留軍の記念写真アルバムと復員届など
古田勇文書 (201903-1~5)

陸軍中支那派遣軍、藤第六八四部隊に所属した古田 勇(1919~2007)が、昭和15年12月から17年8月にかけて、日本軍が占領・駐留する中国の沙市(現中華人民共和国湖北省荊州市)で撮影した写真アルバムと、昭和24年の復員関係資料。
アルバム上の2葉は広島出身の戦友と撮影した記念写真。下は慰問に訪れたタイヘイレコードの舞台上、手前でカメラを構えて立つのが古田本人である。
終戦当時、マラリアを発病して満州国新京(現吉林省長春市)に移動していた古田は、侵攻してきたソ連軍に捕えられ、シベリア(チタ・ナホトカ)での強制労働を強いられた。労働中に左下股部を打撲骨折したが、昭和24年10月、復員船の明優丸で舞鶴へ無事に復員帰還した。

広島招魂祭基金簿

広島招魂祭基金簿

特別預金通帳

特別預金通帳



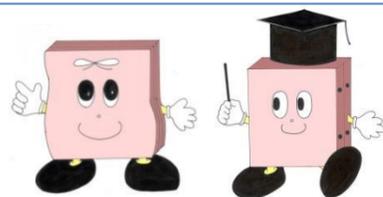
広島招魂祭委員長印

大東亜戦争割引国庫債券(20円)と定期預金証書

大東亜戦争割引国庫債券(20円)と定期預金証書

広島招魂祭基金簿と証書・通帳・債権類 昭和20年(1945) 広島県行政文書(01-2019-312)

戦前の広島では、毎年春秋に西練兵場(現紙屋町交差点北側一帯)で、広島県と第五師団が交互に広島招魂祭を開催した。広島招魂祭では、第五師団と民間人による競馬や、大正時代からはオートバイレース、自転車競走などが行われたこともあって、広島市民が楽しみにしていた祭りの一つであった。
被爆当時、広島招魂祭の基金となる定期預金証書と債券類は、水主町(広島市中区加古町)にあった広島県庁会計課の金庫に納められていた。原爆によって広島県庁は全壊、多数の職員が死亡し、広島招魂祭の基金出納簿は焼失したが、金庫内にあった定期預金証書と国庫債券、広島招魂祭委員長印は奇跡的に無事であった。



広島県立文書館のマスコット モンちゃん(左)とジョーくん(右)

広島県立文書館展示室

広島市中区千田町3丁目7-47
広島県情報プラザ2F
TEL082-245-8444
FAX082-245-4541

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/monjokan/>

令和元年度第3回収蔵文書の紹介展

新たに収集した文書から

開催期間：令和2年1月20日(月)~3月21日(土)

広島県立文書館では、広島県に関する行政文書や古文書、その他の記録を収集し、書庫で保存するとともに、展示や閲覧を通じて広く利用していただいています。

今回の展示では、テーマに沿った従来の展示とは趣向を変え、移管や寄贈・寄託により、昨年度から今年度にかけて、当館の収蔵資料に仲間入りした文書をご紹介します。

この展示を通じて、地域の歴史的な記録資料を収集・保存することの意義をお伝えできればと思います。

霞み免 竹の梢か 東山 鳴雪

霞み免 竹の梢か 東山 鳴雪

葉鶏頭 夏急行 書を曝す 虚子

葉鶏頭 夏急行 書を曝す 虚子

愛媛県知事から広島県知事へ「友愛の水」のお礼として贈られた内藤鳴雪・高浜虚子の俳句「春秋双幅」

年不詳 和氣成祥氏所蔵文書(201911-1)

広島県は、昭和60年(1985)7月、瀬戸田町まで通じていた沼田川の水道用水を、愛媛県からの要望を受け、愛媛県の島しょ部である越智郡宇前町・生名村・岩城村(現越智郡上島町)へ送水した。水道事業が県境を越えることは珍しく、「友愛の水」と呼ばれている。そのお礼として、当時の白石春樹愛媛県知事(1971~1987 在任)から榊下虎之助広島県知事(1981~1993 在任)へ贈られたのが、この内藤鳴雪(1847~1926)と高浜虚子(1874~1959)の俳句掛軸「春秋双幅」である。2人はいずれも愛媛県松山出身で、正岡子規門下の俳人である。



賀茂郡沿岸の道程絵図 文化年間 (1804~1818) 頃 宮谷家文書 (201905-1)

賀茂郡阿賀村(呉市阿賀町)から同郡下市村(竹原市)までの沿岸部を描いた絵図。表題がないため、作成の目的などは不明であるが、朱引きの「御道筋」や、御泊所・御屋所・御小休所などの施設が描かれていることから、広島藩主又はその一族が沿岸部を巡行するに際して、その道程と、宿泊地や休憩地に指定された庄屋宅などを描いた絵図と思われる。庄屋などの名前から、作成年代は文化年間と推測できる。

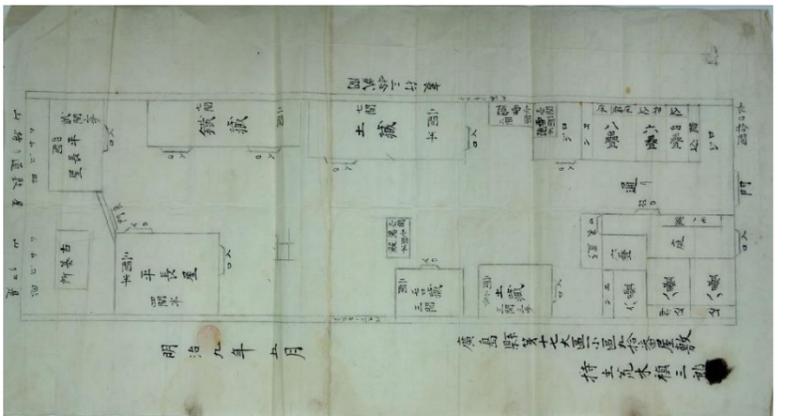
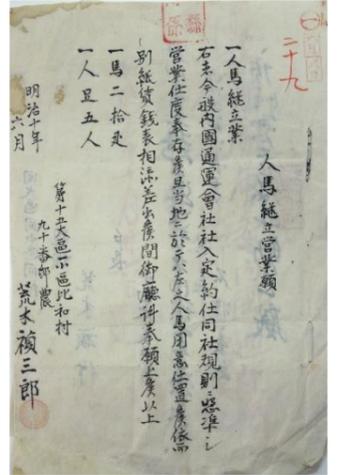
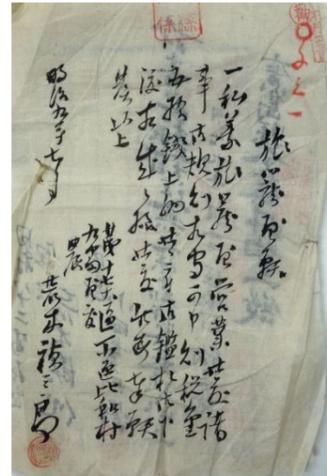


多田 寛の北海道アルバム 明治 29 年(1896)頃



多田家文書 (201805-1)

広島藩士族の多田 寛は、維新後広島警察署の警部となり、その後御調・世羅郡長などを務めたが、辞職して明治 20 年に新天地を求めて北海道へ渡った。北海道でも当初は札幌警察署岩見沢分署長や、滝川・岩見沢戸長などを歴任したが、奈井江(現空知郡奈井江町)の開墾に従事することにした。北海道広島村(現北広島市)の開墾に成功していた広島・段原村出身の和田郁次郎が、第二の広島村を目指して、奈井江に 75 万坪(約 247 万㎡、広島大学東広島キャンパスに匹敵)の原野の払い下げを受け、広島県をはじめ各地から移民を募集したため、それに応じ、入植者の世話係をしながら自らも開墾に励んだのである。このアルバムには、広島村・奈井江村のほか、札幌・小樽・旭川・千歳・登別温泉といった北海道各地や、アイヌの人々の写真も貼付されている。



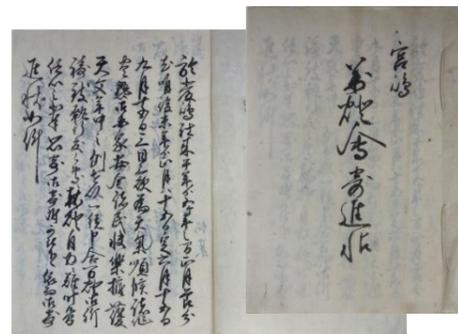
恵蘇郡比和町荒木家の旅籠屋開業願・人馬継立営業願と家宅見取図 明治 9~10 年(1876~77) 荒木家文書 (200810-2~4)

備北地域は広島藩内でも有数の鉄生産地であった。出雲路(阿井越)の宿駅として発達した比和町(庄原市)は、鉄荷物や出雲特産である木綿の駄賃運送で賑わった。江戸時代の荷物の運送は、封建的な宿駅制度のもとで、宿駅に常置される人馬による継立によって行われた。明治 4 年に、政府は従来の宿駅制度を廃止し、陸運会社規則と賃銭表を定め、各駅に陸運会社を設立させて改革を図ったが、自由な営業ができたわけではなく、従来の人馬継立機能を存続させただけであった。比和町の荒木家では明治 9 年に旅籠屋を開業し、翌年には馬 20 匹と人足 5 人で人馬継立業の営業を始めた。その家宅の見取図によれば、同家は、一般的な商家と同様、間口に比べて奥行きが広い。入口付近の部屋が宿泊に充てられたのであろうか。蔵は四つあり、一番奥は鉄蔵である。



和氣成祥宛て竹下虎之助書簡 平成 20 年(2008) 10 月 和氣成祥氏所蔵文書 (201911-2)

「春秋双幅」の掛軸は、竹下虎之助氏が亡くなる 2 か月前に、元瀬戸田町長の和氣成祥氏へ贈った。これはその時に添えられた竹下氏自筆の書簡で、竹下氏は和氣氏がこの掛軸を所蔵する適任者と考えていたことが分かる。瀬戸内海に浮かぶ弓削島・佐島・生名島・岩城島の 4 島(弓削町・生名村・岩城村)は水源に乏しく、断水が頻発していたため、隣の瀬戸田町まで通水した水道をさらに延長してほしいと希望していた。それを聞いた和氣町長が広島県庁へ赴き、竹下知事にその要望を直接伝えたことを契機に、昭和 57 年に両県間で協定が結ばれ、昭和 60 年 7 月、敷設された海底送水管を通じて 3 町村への送水が実現したのである。



宮島万燈会寄進帖 弘化 2 年(1845)9 月 梶矢祥弘氏収集文書 (200507-26)

万燈会は、1 万、又は数多くの燈明をともし、懺悔滅罪・繁栄安穩・諸願成就などを願い、仏や神を供養する法会で、奈良時代から東大寺などで行われている。天保飢饉以降、水害や火災、流行病などの災害続きであった弘化 2 年、厳島神社では、翌年から 5 年間、1 月 15 日、6 月 15 日、9 月 15 日の 3 日 3 夜、天気順候・諸作豊熟・国家安全・諸民快樂擁護を祈願して、万燈会を行うことにした。この寄進帖は 1 燈につき 1 両 2 歩の寄付を募るための趣意書で、1 人で複数燈を寄付しても、複数人で 1 燈を寄付してもよいとされた。

浅野幸長書状 慶長 5~13 年(1600~13)頃 牧村家文書 (201906-111)

牧村家は平清盛嫡男である重盛の次男、平資盛の子孫と伝わる。牧村家初代新兵衛は紀伊国で浅野幸長に仕えたが、慶長年間に死去した。家臣の大橋茂兵衛からの書状でそれを知った幸長は、茂兵衛への返書で、新兵衛俵の三右衛門(後に牛之助)に牧村家の家督相続を許すことを伝えた。

以上

御状拝見仕候、
如仰先日伏見へ罷上
刻者濃州へ御越故
不懸御目、御残多存候き、
随而牧村新兵衛相
果無是非仕合候、
就其跡目之儀
貴様御理二候之条、
則せかれ二可申付候、
可御心易候、猶同名
口左衛門可申進候間、
不能巨細候、恐々謹言
浅紀伊守
十一月十九日 幸長(花押)

大茂兵様
御報

和氣成祥様

竹下虎之助

平成二十年十月吉日

(略)
さて、長年お世話になりました。身の廻りの整理を始めます。同封のもの エヒメ島の白石知事から直接いただいたもので、松山出身の俳人二人の自筆の軸です。私が死蔵していても、どうしようもありませんので、惠贈いたします。御趣味にあうかわかりませんが、広島とエヒメのことで貴兄をおいて引とつていただく適任者をお願い致します。どうかお引取りいただきよろしくお願いいたします。(略)